水曜通信30

東北学院宗教センター編

2023年
9月

第65回 水曜公開礼拝
2023年 9 月20日（水） 18：30－19：00

＜礼拝次第＞

前　　奏：J.S.バッハ作曲（A. イゾワール編曲）
《目覚めよとわれらを呼ぶ声あり》BWV 645

讃 美 歌：39番 「ひくれてよもはくらく」

聖書箇所：レビ記　19章17-18節

讃 美 歌：10番 「わがたまたたえよ」

説 教 題：「私の隣人とは誰ですか」

頌　　栄：539番 「あめつちこぞりて」

後　　奏：J.S.バッハ作曲（F. リスト編曲）
《わがうちに憂いは満ちぬ》BWV 21

説教
大学宗教主任
田島 卓

奏楽
礼拝オルガニスト
山司 恵莉子

後奏の後、山司 恵莉子氏（礼拝オルガニスト）によるオルガン演奏による賛美を行います。

次回第66回水曜公開礼拝は2023年10月18日です。

第64回 水曜公開礼拝報告（説教：松本 宣郎、奏楽：大泉 真理）

2023年７月19日（水）　18：30－19：00

讃美歌：39番　「ひくれてよもはくらく」
聖　書：ヨハネによる福音書　８章12節
讃美歌：326番　「ひかりにあゆめよ」
説　教：「わたしは世の光である」
頌　栄：541番　「ちちみこみたまの」

【説教要旨】

ヨハネ福音書はキリストの自己証言の一つとして「わたしは世の光」だと記す。人間が生きるこの世は、実はいつどうなるか全くわからない闇なのだ、闇に呑まれて滅びるしかないのだ。科学技術の進歩はウクライナでは最新兵器に用いられ，ＡＩは偽物と見分けのつかぬ情報や映像を生み出す。そのような闇に囚われている人類のために神は「光」としての御子キリストを遣わされた。しかし私たち人間が自分から心の扉を開いて光なるキリストを迎え入れないと私たちは闇から出て歩み出すことは出来ない。キリストを受け容れ、み言葉に聞き、世の光としてのキリストに従いゆくものでありたい。　（前理事長・院長　松本 宣郎）

前　奏：ジャン・ラングレー作曲　1.キリエへの前奏曲《フレスコバルディを讃えて》より

ラングレー（1907-1991）は、20世紀のフランスを代表する盲目のオルガニスト、即興演奏の名手、作曲家、教師でもありました。前奏は、手鍵盤で奏される独特な和音を背景に、足鍵盤によって中世から歌い継がれてきたグレゴリオ聖歌“キリエ・エレイソン”（主よあわれみたまえ）のメロディーが奏されます。神秘的な音の空間に吸い込まれていくような作品です。

後　奏：J.S.バッハ作曲「すべての人は死ななければならない」BWV643

バッハのオルガン小曲集の中から死、永遠の生命を歌ったコラール前奏曲です。歌詞は、主イエス・キリストを光と信じる者には、肉体が滅びても、神が共に居られるという喜びと平安が永遠に与えられると伝えています。繰り返される同じ音形、ト長調の響きの中にバッハの想いが込められていると考えられます。　（礼拝オルガニスト　大泉 真理）

大雨の夜でしたが、礼拝とその後の19時00分から30分までの大泉 真理氏によるオルガンによる賛美に37名の方が参加されました。

礼拝後、音楽による賛美（オルガン独奏：大泉 真理）

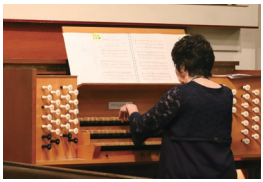
1. ゴードン・ヤング作曲　Prelude on “Sweet Hour”　讃美歌310番「しずけき祈りの」
2. ゴードン・ヤング作曲　Toccata on“Leoni”　讃美歌85番「主のまことは」
3. アリス・ジョーダン作曲　Chorale on Canonbury　讃美歌83番「めぐみのひかりは」
4. ジョン・G.・バール作曲　Partita on“HYMN TO JOY”　讃美歌158番「あめにはみつかい」
   Ⅰ.Hymn to Joy　Ⅱ.Processional　Ⅲ.Pastorale　Ⅳ.Scherzo　Ⅴ.Fughetta and Finale
5. J.S.バッハ作曲　トッカータとフーガニ短調「ドリア調」BWV538より“トッカータ ”

大学礼拝では、教会暦や当日の聖書個所に関連した16～18世記のドイツコラール（讃美歌）の編曲を弾くことが多いですが、今回は、明治以降、アメリカのプロテスタント教会から伝えられ、現在も教会や大学で歌われている英米の讃美歌（Hymn）に因んだ、アメリカ人作曲家の個性的な作品を集めてみました。AGO（米国オルガニスト協会）の研修会や米国長老派教会の礼拝などで出会った礼拝用オルガン音楽です。

４のバールの作品は、ベートーヴェンの交響曲第９番終楽章の「歓喜の歌」のメロディーをテーマとした５つの変奏曲です。変奏はどれも独創的で、特にVer.Ⅴの喜びのメロディーが前半は手鍵盤によるフゲッタで、後半は手鍵盤と足鍵盤のカノンで奏されます。

賛美の演奏の最後はバッハで締めくくりたいと思いました。バッハのオルガン作品の中でコラールに基づかない、いわゆる世俗的な作品といわれる前奏曲、トッカータ、フーガなどの自由作品であっても心に訴えかける作品が多くあります。このトッカータは冷徹なほど規則的な拍動の和音に乗って上行するモチーフが各声部に引き継がれ、躍動感が曲全体に溢れています。明日への活力が湧いてくるような作品です。

（大泉 真理）



宣教師たちの生涯と思想（6）H(ハーマン)・H(ヘンリー)・クック先生の生涯

H・H・クック先生は、1878年に合衆国オハイオ州のニューノックスヴィルで生まれました。1894年から1902年まで、ウィスコンシン州にあった合衆国改革派教会のミッション・ハウスで学びました。幼い頃から宣教師になることを夢見ていたクック先生は、卒業後すぐに、宣教師として仙台に派遣されました。東北学院では、1910年までの数年間、主に英語とドイツ語を担当されました。しかし当初から、クック先生の願いは、教育よりも直接的な伝道活動にあったようです。その希望が叶えられ、1911年からは秋田・山形両県（両羽）での伝道活動に専念するようになりました。クック先生は、日本語にも堪能であり、また当時としては目新しかったヴァイオリン、幻灯機、紙芝居などをオートバイに乗せて、両県下で精力的に巡回伝道を展開しました。しかし、多年にわたる過労によって体調を崩し、1916年に37歳の若さで惜しまれつつ急逝しました。率直で飾らない性格のクック先生は、日本人からも深く敬愛されました。先生のお墓は、今も北山墓地にあります。

（大学宗教主任　藤野 雄大）

中央がクック先生。酒田教会の教会員らが周りを囲む。
（日本基督教団酒田教会蔵、筆者撮影）

― 建築が語る東北学院の歴史（21）―

本号より数回に分けて、東北学院神学部卒の牧師建築家・羽生義三郎が関与したと見られる歴史的教会建築について紹介します。

宮城県内で唯一、設計に関わったと見られる遺構が、岩沼教会（宮城県岩沼市）です。

岩沼教会は、押川方義と吉田亀太郎の伝道により1885年10月に設立された東北最古級のプロテスタント教会の一つで、東北学院とも深い関わりを持っています。現在の建物は1930年に移転新築されたもので、建築後93年を迎えます。ゴシック様式を基調とした意匠や、長方形平面の講堂に三階建ての塔屋が付属する構成は地方教会の典型的な姿を示していますが、一方で、地方のプロテスタント教会としては珍しい石積みと、船底形の天井を鉄材で補強した講堂の内部構造に個性を見出すことができます。粗い素材感を活かした石材は、槻木で産出されたものです。基本設計を羽生義三郎が担当し、施工を仙台の佐藤工務所が担ったようです。東日本大震災（2011）で大きな損傷を受けましたが、関係者の努力で復興を遂げ、献堂当初の姿を今に伝えています。（続）

（工学部　﨑山 俊雄）

岩沼教会外観

岩沼教会講堂内観

東北学院宗教センター 祈祷会実施のご報告

「二人または三人が私の名によって集まるところには、私もその中にいるのである。」
（マタイによる福音書18章20節）

宗教センターは、大西晴樹所長、原田浩司主任を中心に、土樋キャンパス７号館にチャプレン、五橋キャンパス押川記念館３階に主事と職員が常駐し、通常のセンターの働きを担っています。

しかし前期と後期に一度ずつ、幼稚園、中学校・高等学校、榴ケ岡高等学校を訪れて、センター所員であられる園長や宗教主任の先生方だけではなく、校長、教頭、有志の教職員の方々と共に、懇談と祈祷の時をもっています。日々の礼拝や学校の様子を振り返りながら、園児・生徒・学生の歩みが守られるように、またそれぞれの学校につながる教職員や保護者の皆さまを覚えて、心を合わせて祈っています。

東北学院につながる全ての方々の歩みが、主の豊かな恵みのうちにありますように、今後も祈りの時を大切にしてまいりたいと思います。

（宗教センター主事　佐藤 由子）

幼稚園

中学校・高等学校

榴ケ岡高等学校

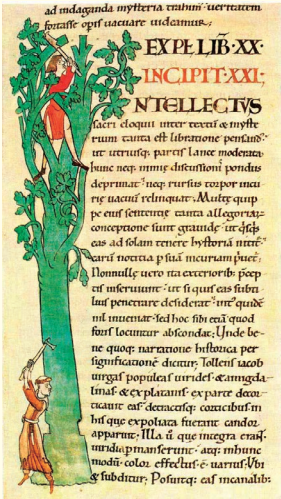
美術による賛美（21）西洋中世美術における滑稽

右の綺麗な写本は、６世紀の聖グレゴリウスが記した『ヨブ記注解（Moralia in Job）』で、シトー修道院の第３代院長スチーヴン・ハルディング（Stephen Harding）が1111年に筆写した写本（番号173）の１ページです。ここでは「20章が終わり」「21章が始まる」と赤字で記された後、文章の最初のイニシャルのアルファベットの「I」の大文字が絵になっています。ページ全体の高さの木が描かれ、赤い服の人がよじ登って枝を払っているのに、下では真面目なはずの修道士が、木全体を切り落とそうとしています。上の仕事は無意味ではないですか。これも笑ってしまいます。

しかし『ヨブ記注解』のこの箇所には、俗人は細かい誘惑に負けないよう気をつけるが、修道士は根本的な誘惑に気をつけねばならないと書かれており、内容に即しているのです。

西ヨーロッパのゴシック時代は教会美術も隅々まで徹底して体系化されると共に、若くして亡くなった美術史家マイケル・カミール（Michael Camille 1958-2002）が画期的な研究書（『周縁のイメージ』邦訳1999年）で言うように、滑稽もまた教義の批評になっているのです。トマス・アクイナスの『神学大全』も精緻な体系です。しかし彼はそれを最晩年に「それらは私には藁くずに見える(videntur mihi palee)」と言って否定します（稲垣良典『トマス・アクィナス』1979年）。キリスト教は常に原点に帰ることが重要なのです。それは言葉（論理や体系）ではないイエスさまとの愛の出会いでした。

（史資料センター客員研究員　鐸木 道剛）



『ヨブ記注解』1111年、Ms. 173, fol.41r　ディジョン、市立図書館蔵

LIFE LIGHT LOVE SINCE 1886

いのち　ひかり　あい

東北学院スクールモットー
LIFE LIGHT LOVE（いのち・ひかり・あい）

東北学院宗教センター編「水曜通信」
第30号
2023年９月６日発行
〒984-8588　仙台市若林区清水小路３-１
発行責任者：宗教センター主任　原田 浩司
東北学院宗教センター　TEL：022-354-8310
Email：c.center@mail.tohoku-gakuin.ac.jp